

一般的聞き手反応と特殊聞き手反応の分類 - 理論と「共感」のパラドックス -

若 島 孔 文^{*1}

要 旨： 本論文では Bavelas et al. (2000) による聞き手反応についての実験研究を追試検討し、心理臨床場面での「共感」のあり方について考察をした。聞き手反応は語り手の話の内容にあまり影響を受けない一般的聞き手反応（GLR）と語り手の話の内容に強く影響を受ける特殊聞き手反応（SLR）の2つに区分された。実験では3つの仮説について検討した。1）SLRの出現する時間は、GLRの出現する時間と比べて、より遅くなるであろう。2）SLRはGLRに比べて、聞き手が話の内容から注意をそらされる条件でより出現することが少なくなるであろう。3）聞き手が話の内容から注意をそらされる条件では、聞き手が適切に話を聞くことができる条件と比べて、話の質が低下するであろう。被験者は20組のペアであり、聞き手が注意深く話し手の話を聴くように教示された物語り群と聞き手が物語りから注意をそらされる言葉数え群のいずれかにランダムに割り当てられた。話し手は危機一髪の体験を話すように求められた。結果は3つの仮説を全て支持するものであった。以上の実験研究の結果から、心理療法場面で重視されてきた「共感」概念に対して考察し、いくつかの示唆を提示した。

キーワード： 一般的聞き手反応，特殊聞き手反応，物語り，心理療法

1. 問 題

Rogers によるクライアント中心療法の提唱以来、臨床心理士、心理カウンセラー、精神科医、教員をはじめとした多領域において「共感」という概念は重要視されてきた。もともこの共感という考え方は精神分析におけるアンファンテリブルの一人である Rank によって提出され、Rogers に導かれたというのが近年の定説である。

この「共感」であるが、「共感」というのは具体的に一体どのようなコミュニケーション現象なのだろうか。これまで実際にコミュニケーション上、「共感」の伝達については言及されてきていない。そこで筆者が着目したのが、Bavelas, Coates, & Johnson (2000) による聞き手反応の機能的分類の

* 1 立正大学心理学部専任講師

実験研究である。この機能的分類は、「共感」とはどのようなコミュニケーション現象なのかを示唆するものである。そこで本論文では、この実験を追試検討した結果を示し、(理論に組み込まれた)「共感」の実践に対して考察を加えることを目的とする。

1 - 1. 聞き手反応に関する研究

まず最初に聞き手反応に関する研究の流れについてここで説明する必要がある。

コミュニケーション研究において、最も影響力のある理論は Shannon-Weaver モデル (1949) である。このモデルでは、どんな場合でも常に送り手から受け手へは一つの一方通行チャンネル (伝達経路) しか存在しない、と仮定する。会話を想定した場合、受け手は常に消極的で受容的な存在とみなされる。Yngve (1970) はこのモデルに見られる送り手、受け手という単純な区別では、実際の会話に適用できないということを指摘し、批判した。

“ 発言の順番を持つ人と持たない人の区別は、伝統的な話し手と聞き手の間の区別と同じではない。なぜならば、順番を外れて話すことは可能であるし、話の好きな人が順番を外れて話すことは、当たり前にしばしば起こることでさえる。実際には、発言の順番を持つ人とその相手はともに同時に話すことと聞くことに携わっているのである。これは、我々がバックチャンネルと呼ぶものの存在によるものであり、それによって、話す順番の人は「はい」や「ふうん」といった短いメッセージを、順番を替わることなく受け取ることができる。” (Yngve, 1970, P. 568)

Yngve は Shannon-Weaver の情報伝達モデルに相似しながらも、バックチャンネルというコミュニケーション行動に目を向けることで、古典的モデルを修正した。すなわち、話し手はメイン・チャンネル (主経路) を持っており、一方、聞き手はバックチャンネルにより話し手の邪魔をしない最小の応答をする、というものである。さらに Yngve はバックチャンネルの存在がコミュニケーションの質に影響することについて示唆している。実際に、聞き手から送り手に対するフィードバックの影響に関する実験的研究は Leavitt & Mueller (1951) によって始まり長い歴史を持っている。続いて何人かの社会心理学者らが実験的手法を用いて聞き手の反応が限定されたり全く無くなったりすると、話し手の情報の記号化の有効性や効率性に影響するということを提示し、聞き手の影響を証明してきた。

例えば、Krauss & Weinheimer (1966) は、話し手がインターコムを介して説明するとき、聞き手のフィードバックが短くなったり消えたりすると、より多くの言葉が使用されることを発見した。同様の課題を使用して、Krauss, Garlock, Bricker, & McMahan (1977) は聞き手からの遅れたフィードバックもまた話し手の情報を送るために使われる言葉の数を増加させることを発見した。Kraut, Lewis, & Swezey (1982) は、聞き手のフィードバックの量を制限しないときに、話し手の話す内容をより適切に理解することを見出した。さらに他の研究者、特に会話分析の研究者たちは、対話 (discourse) が協同活動であることを的確に述べている (例えば、Goodwin, 1979, 1986; Goodwin & Goodwin, 1987)。

以上の研究の流れでは、会話というものが話し手の自律性に基づく相互独白行為としての視点から、協同性に基づき構成、構築される社会的システムとしての視点への移行を示している。

言い換えれば、“話し手と聞き手はともに自律的な活動を越えて進んでいく。そして、その時々でお

互いに話されたことが理解されてもいるということを確認めようと協同する。” (Schober & Clark, 1989, p.211) という視点である。すなわち、対話における言語とは協同活動 (joint activity) に他ならない。

1 - 2. 2種類の聞き手反応

Bavelas et al. (2000) は言語行為の協同活動性を示す中から、聞き手反応の機能的分類を行っている。過去の研究では、聞き手の反応 (バックチャンネルとも呼ばれる) が同一種のものとして一元的に扱われてきた。その典型例はうなずきや一般的な発声 (例えば、『んー』、『ふーん』、『ええ』) のような行為であり、それらは何の物語り的な (narrative) 内容も伝えない。それらの反応は内容を持たないがゆえ、ひとえに聞き手の認知的なプロセスの指標として機能しているように思われてきた。それは、話し手が、相手が理解していることを探知したり、必要な修正を加えるために使用しうる指標であるとするものである。Bavelas et al. (2000) は、これらのバックチャンネルの標準的な例を、一般的な聞き手反応 (generic listener response) と呼ぶ。一般的な聞き手反応は、話し手が話す物語りがどんな内容であるかに関係なく、常に使用される。例えば、心理療法場面で、クライアントが肉親の突然の死に動揺していることについて話を聴いているセラピストも、大学で哲学の講義を聴いている学生も、話を聞いているときにうなずくことはどちらの話題においても適切である。

例 1

話し手：「そうしたら次郎君は時がくれば大丈夫だと思うんで。」

聞き手：「そうですね。」

例 2

話し手：「前回、デカルトについて述べたのを覚えているでしょうか。」

聞き手：「うなずく」

一般的な聞き手反応はリズムを合わせて適切に発されているが、その時の物語りの内容に特有のものではない。綿密な観察者の多くは (例えば、Goodwin, 1986; Krauss et al., 1977; Kraut et al., 1982; Yngve, 1970) 他の種類と思われるような反応についても述べている。Yngve (1970) はデータから以下のような一例を提出した。

“彼は言う「...あなたが財産を蓄えているとき...」そして、彼女は言う、「ひとつひとつ」。彼の述べた「財産」という言葉と同時に。これは、彼は自分の話している部分で何のためらいもないので、彼女が、彼の考えつかない言葉を補おうとしているケースなのではない。彼女の同時の (simultaneous) 行動は、「はい」というような単なる同意の叙述ではなく進んで適切な言葉を提供することによる、彼の言っていることに対する彼女の同意の一例と分析されうる。この分析は財産を蓄えることに関するそれ以前の広い範囲の話し合いによって、彼が言うであろうことを彼女が簡単に予測できるようになったことによって支持される。彼女の発話は抑揚に富んでおり、熱心な身振りの特徴があり、生き生きと同意を示していた。” (Yngve, 1970, p.574)

上述の例では、同意を表すだけでなく、財産を蓄える特定の方法的適切で特別な描写によって聞き手が貢献している。つまり、彼女が話のこの部分を語ることで彼を助けたと言うことである。

こうした聞き手による貢献を Bavelas et al. は特殊聞き手反応 (specific listener response) と呼ぶ。そこには、悲しそうに見える、恐怖で息をのむ、話し手のジェスチャーを模倣する、または（上記のように）適切な言葉を補うといった例が含まれる。そこには、伝統的に形態模倣 (motor mimicry) と呼ばれてきたもの (Bavelas, Black, Lemery, & Mullet, 1986; Bavelas & Chovil, 1997) や、いくつかのハンド・ジェスチャー、さらに短い間投詞も含まれる。特殊な聞き手の反応はその時話し手が言っている内容に強く関連している。そして、その時の話の内容に特有で、全ての物語りに対して適切ではない形を取る。

例 3

話し手：「その時に、私の兄が部屋に火を放ったんです。」

聞き手：[心配の表情]

聞き手の表情は述べられた話題に特有のものである。

例 4

話し手：「私の弟ったら、蛇を私の首においたんです。」

聞き手：[恐怖の表情]

この例では、弟が蛇を首にのせたとき、彼女は恐怖を感じたはずである。この二つの例において、話し手は物語りを描写するために表情を変えているのである。しかしながら、両方のケースにおいて、話し手はただ事実を述べていただけである。つまり、事実の劇的な、または感情的な意味合い（心配とか恐れ）を描写したのは聞き手であり、それによって話が豊かになっていく。

例 5

話し手：「私は進学することをやめました。」

聞き手：「進学という道を行くのではなく。」

話し手：「そうです。就職という道を進むことにしました。」

ここでは、聞き手は明らかに話し手の重要なポイントにちょうどいいような言葉を提供している。さらには、聞き手はちょうど話し手の統語法にあうように言葉を補っていて、話し手は早速、聞き手が物語りの中に差し挟んだ言葉を引用し、組み込んでいる。

このように、特殊な反応によって、その時、聞き手は話を描写したり付け加えたりする協同の語り手 (co-narrator) となる。そのようにすることで、聞き手は物語りに非常に密接についていっているに違いない。

以上のことを端的に言うと、一般的な反応と特殊な反応との違いは機能的なものであり、物語りへの

反応の関係が基礎になっている（そして孤立して聞き手の反応を基にするものではない）。Table 1は Bavelas et al. によって示された一般的な反応と特殊な反応の相違点と類似点である。

Table 1 一般的な聞き手反応と特殊な聞き手反応の類似点と相違点

類似点

- 二つとも適切な反応であり、物語りに関連している。
- 二つとも聞き手が理解していること、注意を向けていること (attending)、ついていっていること (又はいないこと) を示している。
- 二つとも物語りの中の適切な場所で起こる。
- 二つとも物語りの主要な点への反応である、または脱線 (digressions) であること

相違点

一般的な反応：

- 聞いていることである。
- 聞き手は聴衆か観察者にとどまる。
- 物語りや話し手に対してなされる。
- 一般的に物語りに関連している
- 外観として物語りの枠組みに沿っている。
- 物語りの枠組みに反応している。
- 一般的な理解を伝達する。
- 言葉の理解を意味する。

特殊な反応：

- 共に話すことである。
- 聞き手は話の登場人物になる。
- 物語りや話し手と共になされる。
- 物語りのあるポイントに対して特殊である。
- 内容的に物語りの枠組みに沿っている。
- 物語りの枠組みに対して行動 (付け加えを) する。
- 特別な理解を伝達する。
- 言葉の含意の理解を意味する。

この一般的か、特殊かという反応の区別は言語 - 非言語にそって位置づけられるものではない。共に非言語でありながら、うなずきは普通、一般的な反応であり、一方たじろぎは特殊な反応である。言語の『ええ』は、普通は一般的な反応であるが『道を行く』（例5にあるように）は特殊な反応である。さらに重要なことには、聞き手の反応の多くは聴覚的な要素と視覚的な要素の両方を統合したものだということである。例えば、うなずいて『ええ』と言う（一般的）または『やだなあ』と言いながらたじろぐ（特殊）など。こうした視点もまた Bavelas et al. により、統合メッセージモデル (integrated message model) (Bavelas, 1994 ; Bavelas, Black, Chovil, & Mullett, 1990, Ch. 6 ; Bavelas & Chovil, 1998) として提示されている。すなわち、会話の中で統合されたメッセージを作り出すためにこれらの聴覚的行動と視覚的行動をその時々でお互いに統合する、と提案している。(Clark が1996, Ch. 6, esp. pp.185-187. の中で混合物 [composit] と呼んだもの)。この統合メッセージでは、聴覚的な活動と視覚的な活動がともに意味をコミュニケーションするために使用されている。それはまた、表情やハンド・ジェスチャーなどの視覚的な行動を話し手または聞き手のメッセージの一部として扱うということである。従って、こうした聞き手の一般的な反応と特殊な反応との区別はその物語りの文脈の中での反応の意味に拠っているのであり、たまたまそのチャンネルで記号化された身体的なチャンネルによって区別され

るものではない。つまり、ここでのアプローチは意味の解釈に拠っており、分析者間の信頼性が重要になってくることになる。

1 - 3. Bavelas et al. の聞き手反応に関する研究と本研究の目的

Bavelas et al. (2000) は、以上のような対話が単なる個々人の言語の創出や理解以上のものであり、そこにはオンラインの共同プロセスが存在するという提案から、聞き手の注意を話の意味からそらす条件（「t」という言葉を数える）数え条件）と意味に集中させる条件（物語り条件）の2条件の下で2種類の聞き手反応の出現の頻度を比較する実験を行い、聞き手の反応を何の物語り的な意味も伝達しない「一般的な反応」と、物語りに密接に関わり、話し手と共に語ることで会話を豊かにする「特殊な反応」とに機能的分類を行なった。その実験の結果では、数え条件において有意に二つの聞き手反応が少なかったこと、物語りの質の得点が低かったことから、会話における『聞き手』が決して受動的であったり、無視されてしまうような存在ではなく、むしろ話し手と共に協同的に物語りを形成していく能動的な参加者であること、フェイス・トゥ・フェイスの会話での特徴として『可視性』と『同時性』があるということが明らかにされている。本研究では、Bavelas et al. の行った実験を忠実に再現し、追試検討を行いたい。

そこで本研究では以下のような仮説を立て検討する。一般的聞き手反応は話が始まった直後から話の間中ずっと可能であるのに対し、特殊聞き手反応は物語りに関するより多くの情報を必要とすることが考えられる。従って、Goodwin (1986) が述べるように、仮説1：特殊聞き手反応の開始時間は、一般的聞き手反応の開始時間と比べてより遅くなるであろう。また、特殊聞き手反応は、より物語りに密接に関わっていることが仮定される。そのため、一般的聞き手反応と比べてより注意を話の意味からそらす条件では出現しにくくなると考えられる。仮説2：特殊聞き手反応は一般的聞き手反応に比べて、話の内容から注意をそらされる条件でより出現が少なくなるであろう。

最後に、聞き手が話し手の話から注意をそらされてしまった場合、話し手はうまく話すことが難しくなると考えられる。仮説3：聞き手が話の内容から注意をそらされる条件では聞き手が適切に話を聞いている条件と比べてより話の質が低下するであろう。

2. 方 法

1. 被験者 A 大学2人組25組（うち、実験の不備や操作チェックの結果から5組が除かれ、実際の分析対象は20組）。
2. 手続き 20組のペアは次の2条件にランダムに割り振られた。物語り群（統制群）：注意深く話し手の話を聴くように教示された。言葉数え群（実験群）：聞き手が物語りから注意をそらされる状況を作るために、話を聞いているように見せかけて実際には話し手の会話に出てくる「た（だ）」という言葉の数えるように教示された。操作チェックとして、話し手から見えないところにインターホンを設置し、聞き手は話し手が「た（だ）」の言葉を話す回数分インターホンを足で押さなければならぬ。インターホンは隣室にのみ聞こえるように設定され、実験者がモニターをみながらインターホンを数え、操作チェックを行った。

3. 課題 ペアの片方が“話し手”として「危機一髪体験」を話すように教示された。(5分間)
4. 分析 まず実験者が20組の相互作用のトランスクリプトを作成した。

聞き手反応の分類：この実験の意図や仮説を知らない独立した判定者2名が、A反応（一般的聞き手反応のこと）とB反応（特殊聞き手反応のこと）とだけ言われた反応を、VTRを見ながら、作成されたトランスクリプトをもとに分類した。分析者間の一致率は97%であった。

聞き手反応の開始時間：物語り条件の被験者全10組を分析の対象にした。2つの聞き手反応が共に生起しているからである。その組の話し手が最初に発話したときから計りはじめて一般的聞き手反応、特殊聞き手反応それぞれが最初に出現するまでにかかった時間をそれぞれの聞き手反応の開始時間とした。ストップウォッチを利用し、1/10秒の値を四捨五入した秒数を記録した。

話の質に関する評価：1) エンディングのペースは唐突か適当か、2) 適切に“話の山”を膨らませたか、3) エンディングは流暢であったか、4) 話の正当化や弁明があったか、以上の項目について2人の判定者が4件法で評価した。話の評価は独立して行われ、2人の評価した得点の平均値がその話の評価となった。

2つの聞き手反応の生起数の条件間での比較：話し全体における2つの聞き手反応の生起度数を会話時間で割り、一分あたりの各聞き手反応の生起数を求めた。一分あたりの各反応数について2条件で平均値の差の検定を行った。

3. 結果

1. 仮説1の検討 10組全ての物語り条件における各聞き手反応の開始時間を、平均値の差の検定を用いて分析した。特殊聞き手反応 ($M=35.1$, $SD=677.8$) は、一般的な聞き手反応 ($M=3.3$, $SD=7.12$) よりも有意に物語りの後のほうで起こった ($t=3.84$, $df=9$, $p<.01$)。従って仮説1は支持された。
2. 仮説2の検討 物語り条件と言葉数え条件の中で出現した各聞き手反応の1分あたりの出現数について、平均値の差の検定を行った。特殊聞き手反応は、物語り条件 ($M=3.45$, $SD=3.79$) と比べて言葉数え条件 ($M=0.33$, $SD=0.25$) において有意に少なかった ($t=4.90$, $df=18$, $p<.01$)。一般的聞き手反応は、物語り条件 ($M=17.48$, $SD=13.37$) と言葉数え条件 ($M=16.10$, $SD=14.08$) における出現数に有意な差は見られなかった ($t=0.84$, $df=18$, $p>.05$)。従って仮説2は支持された。
3. 仮説3の検討 話のネガティブな質を表す得点に関して、物語り条件 ($M=0.8$, $SD=0.84$) に比べて、言葉数え条件 ($M=1.7$, $SD=0.9$) の方が、有意にネガティブな得点が高くなった ($t=2.15$, $df=18$, $p<.05$)。つまり、言葉数え条件の方が話の質が低下する傾向が見られた。従って仮説3は支持された。

4. 考察

1. 仮説の検討から

仮説は全て支持され、2種類の聞き手反応の分類は妥当であるということが明らかになった。

以上の実験によって、聞き手の重要性とともに、一般的聞き手反応と特殊聞き手反応の違いについて

示すことができた。ここでは少なくとも以下4つのことが示された。

第一に、2種類の反応を分類するさいに、説明が必要ではあったが、本実験の意図と仮説を知らない独立した分析者が非常に高い一致率でそれらを分類することが可能であったということである。

第二に、Goodwin (1986) が予想したように、全体的に起こっている一般的聞き手反応と比べて、特殊聞き手反応は物語りのより後の方で起こるということである。聞き手は、物語りに適切に貢献できるような十分な情報を得るまで特殊な反応をしないし、することができないのである。特殊な反応は、本実験で見られたように、物語りのクライマックスにあたる「危機一髪の出来事」に対して適切である。それゆえ特殊聞き手反応は、一般的聞き手反応よりも物語りの複雑さの影響を受けやすい。それら2つの反応の物語り自体との関係の違いは、聞き手の反応を同種のグループとして扱うべきではないという考え方の重要な証拠である。

第三に、気をちらされた聞き手は、そのような状況の中でも一般的な反応はするが、特殊な反応はほとんどしなかった。物語りの適切な部分で正確な特殊反応をするために、聞き手は話の意味を適切に理解していっていなければならなかった。

第四に、聞き手の気をちらすという同様の条件で話し手自身も影響されていた。他のことに気を取られていたり、話し手の物語りというよりは、むしろ言葉自体に注意を向けている聞き手に対して危機一髪の話をした話し手は全体的にあまりうまく語ることができず、特にドラマティックな結末において何が起こったのかを語る部分でうまく語れなかった。彼らの物語りのエンディングは、まとまりが悪く、唐突であったり、エンディングを何度も言い直したりし、明らかに危機一髪だったとその話を正当化することがよくあった。これに対するひとつの非常に妥当と思われる理由としては、聞き手の反応という相互的なもの、特に特殊な反応が欠けることで物語りを語ることにとまどいを感じさせてしまったのではないかということである。つまり、問題の一部は、聞き手が物語りに貢献していなかったということである。その時々で話がなめらかに、そして効果的に終わるように聞き手を手伝う通常の聞き手とは対照的に、気をちらされた聞き手は、話し手と一緒に進むことができなかったのである。

以上のことから聞き手は2つの意味でコ・ナレーターであると考えられるのである。第一に、彼らは特殊な反応を通して、話し手の話に鮮やかで助けになる構成要素を提供する。もしそれがなければ話し手はうまく話をできなくなってしまう。第二に、気をちらされた聞き手の影響で物語りの質が悪くなってしまったということから、聞き手は話し手がよい語りを行うための手助けをしているということが明らかになった。聞き手は、話し手と同等とは言えないかもしれないが、コ・ナレーターであると言える。

2. 理論と「共感」のパラドックス

本論文の最初にふれたように、心理臨床において「共感」は重要視されてきた。言わば鍵概念の一つである。「共感」とは、一般的な考え方として「相手の目で見、相手の耳で聞き、相手の心で感じる」こととして述べることができるものである。

さて、以上の実験研究から、(理論に組み込まれた) この「共感」の実践に対して考察を加えたい。

一般的聞き手反応は、話の内容と比較的独立した形で出現するコミュニケーションであり、一方で、特殊聞き手反応は話の内容に強く依存した形で出現するコミュニケーション行動であった。こうしたこ

とは、特殊聞き手反応が一般的聞き手反応と比べて、語り手の物語りのより後ろで生じること、また、気をちらされた聞き手がその表出を著しく制限されたことから示された。すなわち、これらの聞き手反応では、とりわけ特殊聞き手反応が「共感」の伝達と深く結びついている可能性が高いと言えよう。それは語り手の話の内容（物語り）に強く依存した反応であることから推察されることである。この推察の上から、本実験は心理臨床の実践に多くの示唆を与えることになる。それは心理臨床家がある理論の枠組みで語り手の話の内容を「解釈しようと意識すること」や語り手にとにかく「共感しようと意識すること」は、本実験の被験者が話し手の伝達内容から「た（だ）」という言葉のみに着目した行為に近似するものである。特殊聞き手反応のように「共感」の伝達に関わるコミュニケーション行動は、「た（だ）」という言葉の数えることで制限を受けたことを思い出して欲しい。こうして見ると心理臨床の理論（例えば「共感」という理論）と「共感」の実践はとてもパラドキシカルな構造を示しているように思われる。神田橋（1997）は“共感と思われることが思い入れにならぬように”と述べ、成田は共感について“無心に近づくこと”（成田・氏原, 1999）と述べている。また、牧原（2000）はその極めてすぐれた論文の中でそれに非常に近い共感についての視点を提示し、“not knowing position”にふれている。この“not knowing position”というのは Anderson によると、“知識を棚上げ”して心理療法場面での会話を進めることである（参考として、長谷川・若島, 2002）。それはまた、コラボレーティブな心理療法において重要なことであるとしている。すなわち、心理臨床家が「共感」ということを大切なものとする限りににおいて、「理論」をまずは棚上げして、会話を進める必要があるようである。心理療法がセラピストとクライアント間での協同的会話行為である以上、本実験で導かれた知見は重要な示唆となろう。

引用文献

- 1) Bavelas, J. B. 1994 Gestures as part of speech: Methodological implications. *Research on Language and Social Interaction*, 27, 201-221.
- 2) Bavelas, J. B., Black, A., Chovil, N., & Mullett, J. 1990 *Equivocal communication*. Newbury Park, CA : Sage.
- 3) Bavelas, J. B., Black, A., Lemery, C. R., & Mullett, J. 1986 “I show how you feel.” Motor mimicry as a communicative act. *Journal of Personality and social psychology*, 50, 322-329
- 4) Bavelas, J. B. & Chovil, N. 1997 Faces in dialogue. In J. Russell & J. -M. Fernandez-Doles (Eds.), *The psychology of facial expression*, 334-346. Cambridge, U. K. : Cambridge University Press.
- 5) Bavelas, J. B. & Chovil, N. 1998 An integrated message model of language in face-to-face dialogue. Unpublished manuscript, Department of Psychology, University of Victoria.
- 6) Bavelas, J. B., Coates, L., & Johnson, T. 2000 Listener as co-narrators. Unpublished manuscript, Department of Psychology, University of Victoria.
- 7) Clark, H. H. 1996 *Using language*. Cambridge, UK : Cambridge.
- 8) Goodwin, C. 1979 The interactive construction of a sentence in natural conversation. In G. Psathas (Ed.), *Everyday language : Studies in ethnomethodology*. New York : Irvington

Publishers.

- 9) Goodwin, C. 1986 Between and within : Alternative sequential treatments of continuers and assessments. *Human Studies*, 9, 205-217.
- 10) Goodwin, C. & Goodwin, M. H. 1987 Concurrent operations on talk : Notes on the interactive organization of assessments. *IPRA papers in Pragmatics*, 1, 1-54.
- 11) 長谷川啓三・若島孔文 2002 事例で学ぶ家族療法・短期療法・物語療法. 金子書房
- 12) 神田橋條治 1997 対話精神療法の初心者への手引き. 花クリニック神田橋研究会
- 13) Krauss, R. M., Garlock, C. K., Bricker, P. D., & McMahon, L. E. 1977 The role of audible and visible back-channel responses in interpersonal communication. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 523-529.
- 14) Krauss, R. M. & Weinheimer, S. 1966 Concurrent feedback, confirmation, and the encoding of referents in verbal communication. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 343-346.
- 15) Kraut, R. E., Lewis, S. H., & Swezey, L. W. 1982 Listener responsiveness and the coordination of conversation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 718-731.
- 16) Leavitt, H. J. & Mueller, R. A. 1951 Some effects of feedback on communication. *Human Relations*, 4, 401-410.
- 17) 牧原 浩 2000 共感と言語. 家族療法研究, 17 (3), 229-237.
- 18) 成田善弘・氏原 寛 (編) 1999 共感と解釈. 人文書院
- 19) Schober, M. & Clark, H. H. 1989 Understanding by addressees and overhearers. *Cognitive Psychology*, 21, 211-232.
- 20) Shannon, C. E. & Weaver, W. 1949 A mathematical theory of communication. Urbana : University of Illinois Press.
- 21) Yngve, V. H. 1970 On getting a word in edgewise. *Papers from the Sixth Regional Meeting of the Chicago Linguistics Society*, 567-578. Chicago : Chicago Linguistic Society.

付記：本研究はジャネット・ピーバン・バーベラス博士（ヴィクトリア大学）、平野貴子さん（東北大学大学院修士課程）、生田倫子さん（日本学術振興会特別研究員）、花田里欧子さん（日本学術振興会特別研究員）との共同研究プロジェクトの一部として行われたものである。また、その一部は日本社会心理学会第43回大会で発表されたことを付記しておく。

ABSTRACT : In this article, we restudied the experimental work on listener response proposed by Bavelas et al. (2000) and considered the presence of “empathy” in psychotherapy setting. Listener response is classified into two types, generic listener response (SLR), which is not greatly influenced by the content of the speaker's story, and specific listener response (SLR), which is greatly influenced by the content of the speaker's story. The experiment investigated the three following hypotheses. 1. The time SLR appears should be later than the time GLR appears. 2. Compared with GLR, SLR should appear less frequently in conditions where the listener's

attention is diverted from the contents of the story. 3. The quality of the story should decrease in conditions where the listener's attention is diverted from the contents of the story in comparison to conditions where the listener can listen to the story appropriately. The subjects were 20 pairs randomly separated into two groups where the listener was taught to listen carefully to the speaker's story (narrative condition) and a group where the listener was told to count how many times the speaker spoke the words "ta" and "da" (count condition), in order to divert the listener's attention from the speaker's story. The speaker was asked to tell a story about a close call experience. The results support all three of the hypotheses. Finally, we discussed the concept of empathy, of which great importance has been placed in the psychotherapy setting, and gave several suggestions based on the results of this experimental work.

Key Words : generic listener response, specific listener response, narrative, psychotherapy.